

学生たちの観た日本

大学名： 北京大学

氏 名： 邵典

テーマ： 3.マナーの良さと思いやり

4.日中間の交流

「咄嗟失道爾迴駕、沔彼流水趣東瀛(南北朝時代・南斉の政治家王融の『浄行頌・回向佛道篇頌』内の一文、「東瀛」は東シナ海または日本の意)」、私はついにこの漢や唐の時代からわが国と深いつながりのある「一衣帯水」の隣国を直に体験できた。

日本では時間が過ぎるのがとても速かったが、非常に印象深かった。特に感動したのは、日本人のマナーの良さと礼儀正しさである。深いお辞儀や至るところでの敬語の使用、そして心から感謝を伝える、自発的に社会のルールを守るなど、その場にいるだけで自然と礼儀の国としてのあり方を感じることができる。実は「礼儀の国」という単語は、常々私たちが自分たち中国のことを指す場合に使っており、中国5千年の輝かしい歴史による文化は各国に「誇れる」ものとなっているが、マナーの遵守や伝統文化の継承という点では、改善はしているものの未だ不備がある。その不備の原因については、私は教育にあると思う。日本では子供へのマナー教育がしっかり行われているが、わが国では家庭や学校におけるマナー教育への意識が欠けている。そして日本では明治維新以降、こうした文化や伝統が途切れることなく受け継がれている。私は個人的に、日本は島国であるため、発展により一定の人口密度になった場合、必ずルールに従う必要があり、さもないと社会の安定が難しいのだと思う。

現在日本は間違いなく先進国であるが、私たち中国の発展の勢いも重視されている。いかに正しく中国の発展をとらえるか、またより良い未来のためにいかに正しく歴史と向き合うか、これらはいずれも非常に重要な問題である。それぞれの国には平等に発展する権利があり、狭隘な民族主義が交流の妨げになってはならず、ウインウインの局面には理解、包容、尊重そして協力が必要である。中日両国が理性的そして積極的な交流により、共に世界の発展の潮流に同調し、今後両国がさらに発展していくことを願っている。

大学名： 北京大学

氏 名： 劉益瀚

テーマ： 3.マナーの良さと思いやり

中国は礼儀の国を自称しているが、現在の中国人の素養やマナーについては褒められたものではなく、茶道が茶葉の故郷である中国ではなく日本で受け継がれているように、マナーや礼儀の重要性も日本ではっきりと感じる事ができた。

日本語には複雑な敬語体系があり、日常生活における様々な状況でそれら敬語は繰り返し使われている。例えば「ありがとうございます。おはようございます。」といった言葉は、日本のサービススタッフの笑顔のように常に彼らから耳にする。私の専攻は心理言語学で、いくつかの言語についてはある程度研究しているので、日本語には丁寧な表現とくだけた表現があり、日本の若者の間では圧倒的にくだけた表現が使われていることも知っていたが、この8日間私が耳にしたのは全て丁寧な表現であった。

日本人は公共の場においてとても秩序立っていて、道路には落ち葉もほとんど無く、地下鉄やエスカレーターなど

でもとてもマナーの良さを感じる。混み合っていないわけではないのだが、常に秩序が保たれている。関東ではエスカレーターに乗る際は左側(関西では右側)に立ち、もう片方を急ぐ人のために空けている。そして地下鉄に乗る際は、皆がドアの両端に並び、下車する人が先にドアの中央から下車をする。こうした譲り合いはマナーを体現しているだけでなく、知恵を体現しているとも言える。なぜならこうした譲り合いが効率の良さをもたらしているからである。

大学名： 北京大学

氏 名： 邢仕傑

テーマ： 3.マナーの良さと思いやり

4.日中間の交流

日本は美しくそして温かみのある国であった。今回の訪問で私はこの国の自然や文化的美しさを心から感じることで、これまで中国国内で聞いてきた日本の悪い部分を全てかなぐり捨てることができた。

日本の国土は大きくはなく、中国のように多くの壮麗な山河の景色があるわけでもない。しかし日本は、その特有のしなやかで美しい風情ときめ細やかさが特色ある風景を形成している。日本の景勝地では、私たちが感じるべきはその景観と文化の融合だと思う。鬱蒼とした森の景色のみならず、その人にやさしい管理方法はとても目新しかった。道路は狭いが混雑を感じさせず、人口密度は非常に高いが一人ひとりが十分に恩恵を受けることができる。こうした素養と光景は日本人の厳しい管理や自分を厳しく律する点と深いつながりがある。

そして文化的な面について言う場合、日本のマナーについては言わざるを得ない。私たちは皆朝にはホテルのスタッフからの心のこもった挨拶を受け、企業訪問終了後には手厚い見送りを受けた。そして街においては車や人々が互いに譲り合う様子を目にするなど、私はとても感銘を受けた。日本人の行動規範は他人へ迷惑をかけることであるのは誰もが印象深いですが、日本では浮かれたり功利に走ったりすることなく、自身の職分を全うすることが一番大事なこととなっている。これらは発展とともに人の心も浮ついている中国とは全く異なるものである。私たちは過去の出来事にとらわれるべきではなく、現在について言えば、私たちは学びそして交流をすべきなのである。

堂々たる中華には5千年の歴史があり、そして中日国交正常化からもすでに半世紀近く経過している。私は交流と友好そして学習がこの時代の基調となっていくよう願っている。

大学名： 北京大学

氏 名： 曾瑩

テーマ： 1.国民性についての理解

8日間の訪日によって、私は日本の一般市民、そして一般市民によって形成される企業やコミュニティ、また企業やコミュニティによって形成される日本という国を体験することができた。その中で小さなものから大きなものまで、ミクロなものからマクロなものまで次第に自分の心の中で日本への好感度が上がってきたが、最も感動したのがホームステイの2日間であった。

他のメンバーとは異なり、私はショッピングモールでの買い物や浅草寺や皇居といった観光スポットの見学はせず、観光体験ではない彼らの日常生活を体験したいとホストファミリーにお願いした。そのため若いホストファミリーは、彼らのお子さんの遊び場や旦那さんの地元風味のラーメン屋、そして日頃訪れるデパートなどに私を連れて行ってくれ、お子さんにご飯を食べさせたり手料理を食べたりした。そしてテレビでドラマ「ゴシップガール」を見て、公園の観

覧車に乗り、水族館やディズニーランドへ行った。私は日本の一般市民は日頃から秩序や調和のある生活をしているのだと感じた。政府は多くの福利施設をつくり、市民は互いに尊重し礼儀を重んじ、スーパーでは自由な決済が可能、ディズニーランドの出口は人が多くても盗難探知の設備を設置していないなど、こうした光景は私が以前オックスフォードで見たものとそっくりで、唯一違うのは皆黄色人種であることだけであった。ここには私たち中国人と源を同じくするが、より自律的で高い素養を持ち、調和のとれた生活をおくっている人々がいるのである。

私はかつて自分の国や人種に対して疑念を持ったことがある。それはヨーロッパでの遊学を終えバンコクの空港で中国の同胞と列に並んでいた時のことである。子供や大人たちが様々な地方の中国語を口にし、大きな荷物とともに寝そべったり、騒いだり喚いたりしながら搭乗を待っていた。そしてキャンパス内ではとても騒がしく、またものすごいスピードで運転し他人に泥水をかけることを気にも留めない留学生をよく見かけたが、それらは皆黄色人種であった。日常生活におけるこうしたシーンにより、かつて私は欧米との差に絶望感を覚えたことがあった。しかし今回日本で、私はついに綺麗な道路や仕事へのひたむきさ、そして常にお詫びと感謝を口にする人々などを見て、この世界にも素晴らしいアジアの国があり、進んだ黄色人種社会があることに感動した。そして日本にもかつて現在の中国のような問題があり、さらに汚染やバブル経済、危機などの問題もあったことを知り、私は自分の祖国が将来、高い教養を持つ人で溢れ、人々が尊重し合い、夜でも戸締りをする必要がないほど安全で、本当の意味で素晴らしい大国になれることに対してより一層希望を持つことができた。

大学名： 北京大学

氏名： 馬洪林

テーマ： 6. 今後ますます中国でニーズが高まる技術

今回見学した6つの企業の中で、最も印象深かったのは礮子火力発電所であった。私は日本企業の高い科学技術力に感服させられた。

礮子火力発電所の特徴は、まず都市部に建設された発電所であり、そして世界でもトップクラスの脱硫技術と脱窒技術、そして粉塵除去技術を有し、汚染を最低限度まで減らすことができる、ということである。

私はこれまで火力発電所が都市部にあるということを想像することができなかった。だが東京と北京の大気を比べると、日本が環境保全の面で中国の遙か先を行っていることがわかる。この差は人々の意識に関わりがあること以外に、科学技術における大きな差にも表れている。日本企業はすすんで資金を環境保全に関わる科学技術研究に投入しているのである。

私はこうした技術の需要は今後中国で拡大してくると思う。理由は2つある。まず中国の現在の発電方式は火力発電が主で、特に北京は多くの火力発電所がある。そのためこれらの発電所には相応の技術革新が必要である。そして中国の都市部の大気状況が特にひどく、新たなクリーン技術を積極的に採用する必要がある。

いずれにしても、政府が環境面に対策を講じ、北京でも東京のような青空が見られることを願っている。

大学名： 北京大学

氏名： 郭家棟

テーマ： 4. 日中間の交流

偏見を無くし、共に繁栄を-中日関係の未来

知っての通り中日両国には遥か昔からの交流の歴史があり、その交流により両国の人々には似通った文化的背景がある。近代以降、双方には一時期衝突があり、互いに異なる現代化の道を歩んできたが、今日に至り東アジア情勢は改めて変化をしており、新たな中日関係を模索する必要がある。

私は、中国と日本の関係がこれまで良くなかったのには、政治や世論操作、そして両国の民間における互いへの偏見という理由があると思う。前者について言えば両国の政府の努力で解決は可能だが、後者は民間の交流により改善をするしかない。まさに今回の活動のように、祖国を離れ、日本という新たな土地に立ち、真に日本を体感することで、幼いころから見聞きしたことによる偏見を無くすることができるのである。

現在の東アジアにおいて、中国の発展は抗うことの出来ない歴史の波だと言える。日本はアメリカとの同盟により中国を牽制することを選択しているが、長い目で見ると、それは良い選択だとは思わない。逆に、それにより日本は発展を続ける良い機会を失ってしまうように思う。日本と韓国の産業構造は似通っているが、日中関係が冷え込んだことにより、昨年中韓貿易の規模が中日貿易の規模にせまったという例がある。日本は今後を見据え、中日関係を次第に改善し、中国の人々の感情を傷つけることはせず、対抗することなく、中国とともに新たな東アジア秩序を構築しともに繁栄していくべきで、これこそが未来の中日関係のあるべき形だと思う。

私は、こうした過程において民間交流は必要不可欠であり、今後より多くの日本人が中国を訪れることで、中日関係の未来は明るいものになると思う。

大学名：北京師範大学

氏名：王言

テーマ：1.国民性についての理解

3.マナーの良さと思いやり

5.アニメなどのソフトパワー

俗に「百聞は一見にしかず」と言うが、今回日本を訪れ、この近くで遠い国に対してより一層の理解と認識を得ることができた。

日本について最も印象深かったのはその礼儀であった。各企業の見学を終える度に、その企業のスタッフが門まで見送りさらに視界から車が見えなくなるまで手を振ってお別れをしてくれた。こうした心からのもてなしを私はこれまで体験したことがなかった。他人への思いやりについて言えば、日本人は「他人へ迷惑をかけない」ことを心掛け、たとえ他人に足を踏まれたとしても、踏んだ相手に対して謝罪をする。電車に乗る際は皆携帯電話をマナーモードにし静かにしている。たとえ話をする場合でも他人の迷惑にならないよう小声で話をする。中国は日本と同様に礼儀の国ではあるが、その礼儀について言えば日本より劣っている。日本人のこうした思いやりの精神を私たちは学ぶべきだと思う。

次に日本の国民性について言えば、結局のところやはり他人へ迷惑をかけないということである。それから集団意識とチームワークである。こうした点は個人の個性や自由を一定程度妨げるものかもしれないが、効率を高め、社会全体の発展を促進することに繋がっているのは間違いない。日本人が尊重するのは個人の英雄主義ではなく、一種の「歯車」のような精神なのかもしれない。つまり自分の仕事をやり遂げ、協調性と協力を重視するということである。

最後に日本のソフトパワーについて述べたい。現在グローバル化の進展に伴い、各国の競争における総合的国力の役割がさらに増しているため、ソフトパワーについても非常に重要なものとなっている。日本はアニメ王国であり、様々なアニメが受け入れられ、文化産業は高度に発達している。それと同時に日本経済の発展にも重要な貢献をしている。それに対して中国は、すでに世界で2番目の経済国となり経済レベルも飛躍的に成長しているものの、ソフトパワーの面では依然として弱く、文化産業の経済に対する牽引力はさほどない。そのためソフトパワーを強化し文化

的に強い国を構築することが求められており、それには私たちが他国の進んだ文化から学び、そこから自分たち特有の新たなものを生み出す必要があります、そうすることで長年にわたる発展が得られるのである。

今回細かな視点から日本を観察し、非常に多くの収穫が得られた。

大学名：北京師範大学

氏名：王蓉

テーマ：1.国民性についての理解

俗に国民性とは、ある民族が特定の生存環境において次第に形作った民族心理と思考方式である。日本の国民性に関して、二つの面から私の考えを述べたいと思う。

まずは平穏を願う心理である。日本では一般的に、人々が公共の場所において大声で話をするのではない。初めて日本に着いた時、これまで比較的大声を出すことが多かった私は、静かな状態を保たなければならないこの点が馴染めなかった。私たちは中国人同士が大声で口論する様子を容易に想像できるが、もしこれが日本人同士の場合、口論する様子を想像することが難しいと思われる。日本人は常に他人と調和のとれた関係を維持することを願っており、それにより自身の平穏無事を実現しているのである。

次にチームワークである。日本人の全体主義は私たちのそれとは多少違っていると思われる。私たちの考える全体とは社会や国といった大きなものだが、日本では会社内のチームといった小さなもののように思われる。中国大使館を訪問した際に、大使夫人が中国と日本のサッカーナショナルチームについてお話をされた。前者は自己主張が強く、協力はするが協調性が弱い。それに対し後者は協調性と協力に比重を置いているため、より勝負強い。再び私たち自身を例にとると、今回の活動内容には学生による発表の場面があり、各学校それぞれに代表者がいた。しかしこれは本来すべての人が意見を出し合い完成すべきもので、5人ないし6人が一つのチームとなって、チームの利益と発展のために貢献すべきであるのに「私は代表ではないから発言しなくてもよい」といった無関心な点が見られた。それに対して日本人は、自発的に自分なりの貢献をしており(例えばごみ拾いやごみの分類などもそうであるが)、こうした中国では全くありえないことを日本が見事なまでに実行しているのは、本当に並外れたことだと思う。

日本のこうした高い自発性にとっても興味がある。大学三年生ではこれをテーマに研究を行い、それらの生まれた時期や歴史および根源について深く探りたいと思う。

大学名：北京師範大学

氏名：楊金鳳

テーマ：2.集団帰属意識の強さ

3.マナーの良さと思いやり

今回の日本訪問はわずか8日間であったものの、至るところで日本人の礼儀や他人への思いやりを感じる事ができた。例えば企業や学校訪問の際、私たちのバスが到着するより前にすでに出迎えの人々が待っていて、会場に入れば盛大な拍手、お別れの際は私たちのバスが見えなくなるまで手を振って別れを惜しんでくれた。また日本のレストランでは毎朝「おはようございます」や「いらっしやいませ」といった挨拶や歓迎を受け、また朝食サービス自体も非常に心配りがされておりとても心地の良いものであった。そしてガイドの中島さんから日頃からバス内で、自分の所持品はしっかり管理し、他人に迷惑ひいては団体のスケジュールに影響を及ぼすことのないよう注意喚起があり、私は

日本人の他人への思いやりや自分のことはしっかり行い他人へ迷惑をかけないという心掛けを感じることができた。さらに電車内には携帯電話の使用や喫煙の禁止のマークがあり、他の乗客への配慮が感じられた。またエスカレーターに乗る際は、人々が一列に並び、片方を急ぐ人の通行用に空けていた。

集団意識に関して私が印象深かったのは、住友商事での懇親会の際に、スタッフが通常17時30分が終業だが、日常的に18時30分まで業務を行い、忙しい時には22時以降まで残業をすと言っていたことである。こうした会社の利益を最優先する集団意識にはとても敬服させられた。

大学名： 北京師範大学

氏 名： 臧曉慧

テーマ： 3.マナーの良さと思いやり

今回私は初めて日本を訪れた。その中で最も印象に残ったのはマナーと他人への思いやりであった。

まずは細部まで行き渡った礼儀である。この点はサービス業で特によく表れていた。デパートでの買い物であれ、レストランでの食事であれ、入店してからの挨拶に始まり、販売員の対応や注文を受ける際の丁寧さ、そして退店時の挨拶まで全ての過程が心地良さを感じさせる。この他、企業の見学を終えてお別れをする際、企業の皆さんは私たちの乗るバスが見えなくなるまで手を振って別れを惜しんでくれ、私たちはこうした行いにとっても感動させられた。しかもこうした礼儀正しさは日本人の生活における日常的なものであり、例えば他人にぶつかられても、それは自分が道を塞いでいたからだと考え、相手にお詫びの意思表示をするのである。

それから他人への思いやりにも感動させられた。コンビニであれデパートであれ、沢山買おうがそうでなかろうが、いずれも丁寧に袋詰めをしてくれて、お釣りとレシートを手渡しさらに感謝を述べる。そしてエスカレーターでは片側に一列に並んで乗る。この行為は急いでいる人を先に行かせるための思いやりから生まれている。

以上が今回の訪日で最も印象深かったことである。

大学名： 北京師範大学

氏 名： 朴美陽

テーマ： 1.国民性についての理解

日本において最も印象深かったのは、清潔な道路や美しい風景、また沢山の素晴らしい商品などではなく、日本人の人々であった。会社の従業員の職業モラルやひたむきさには敬服させられ、一般市民の礼儀正しさと友好的な態度には感動でいっぱいになった。今回の「走近日企・感受日本」の活動において私は、勤労と誠実を尊重する日本人の飽くなき進歩を目指す仕事ぶりや真面目な生活ぶりを直に目にした。そしてこのような日本人の人々による集団意識と他人へ迷惑をかけないという考えは私たちが最も学ぶべきものである。

街の至るところで見かける「みんなの〇〇」、これには日本人の強い集団帰属意識が表れている。ホームステイ先では子供に対して「他人へ迷惑をかけない」という言い聞かせる場面を幾度と見かけた。これも日本人が「礼儀と他人への配慮」を小さな頃から躾けられていることを反映しており、また日本人の時間概念にも他人へ迷惑をかけないという礼儀の文化が表れている。今回の日本訪問では、到着するそれぞれの場所において詳細なスケジュール表が配られ、活動内容が事細かに手配されていた。この他、親切に道を教えてくれたおじさん、落とし物を届けてくれた店員さんなどいずれも印象深く、私は日本人の人々の友好意識と親切さを強く感じる事ができた。

わずか8日間では日本の社会全体を見ることはできなかったものの、私の日本への理解増進と中日友好への理解にとっては非常に大きな手助けとなった。今後より多くの両国の人々が互いに行き来し理解を深め、互いの距離による誤解が生まれぬよう願っている。

大学名：北京師範大学

氏名：刁愛敏

テーマ：3.マナーの良さと思いやり

日本語を専攻する以前は、テレビドラマや他人からの話で日本人の礼儀に対する意識が高いことを感じていたが、日本語を学んで以降は実際に日本人と接することも増え、本当の意味で日本の礼儀に対する重視の度合を理解することができた。日本に来てからは、すれ違う人々は、それが知り合いであろうとなかろうと、たとえエレベーターや廊下であれ、互いに視線が合えば皆お辞儀をする。お辞儀そのものは当初中国から日本に伝わったものであるが、この伝統的な礼儀をより発展させ広めるといふ意味では日本の方が優れていると言わざるを得ない。

この他、日本の子供は他人へ迷惑をかけないように日頃から教育されており、何をするにもまずは自分のことをやり終える。ある日バスから丁度登校中の子供たちを見かけた。歳は11、12歳くらいだろうか、ランドセルを背負って歩いていた。

そして私にとって、ホストファミリーはとても印象深かった。家の中は整然としており、ご夫婦とも仲睦まじく、全てにおいてお客さんを優先し、ほんの些細なことでも「ありがとう」や「ごめんなさい」を言っていた。

あるいはこれは日本民族の内面にある根本的なものなのかもしれない。皆さんそれぞれが「礼儀正しい」のである。中国人にとってはあまり馴染めないかもしれないが、彼らのこうした礼儀正しさには敬服させられた。

大学名：北京理工大学

氏名：高健

テーマ：4.日中間の交流

今回日本を訪れ、私は様々な日本の姿を体験した。日本へ出発する前の面接の時に、「あなたは日中関係の発展についてどう思いますか？」という質問を受け、私は日中関係を強化するには両国の人々、特に青少年の相互交流を強化しなければならないと答えたことを覚えている。そのためここでは私は日中間の交流について述べたいと思う。

現在、中日間の交流は様々な分野に及んでいる。例えば私たちのこうした訪問団や民間団体の訪問などはいずれも現在の日中間の交流が増えていることを示している。しかし、私はこうした交流は未だ不十分なものだと思う。一部の交流は表面的なもので、中身が伴っていないため、本当の日本を体感することは不可能である。そこで私は青少年の交流が重要だと思う。青少年は両国の未来であり、両国の青少年が互いを認めそして理解し友好的な往来ができてこそ、両国の人々が友好的になり、さらに両国が平和的な発展をし、ひいては両国の意見の食い違いや争いが解決されるのである。そのため私たちのような大学生の交流はとても意義深いと言える。しかし大使夫人の言葉どおり、中国の大学生が日本を訪問するように、日本の大学生にも中国を訪問してもらうべきである。なぜなら交流とは相互的なものだからである。

だからこそ私は中日両国が互いの交流強化のため、頻繁に大学生を派遣し訪問させることを願っている。

大学名：北京理工大学

氏名：李緒嘉

テーマ：3.マナーの良さと思いやり

今回の訪日で最も印象深かったのは2日間のホームステイである。時間こそ短かったものの、それは心から楽しくまた充実したものであった。

まずはホストファミリーのご夫婦について。お二方とも中国語と英語を嗜んでいらしたが、とても上手というわけではなかったので、時に私の話す言葉を理解されないことがあった。しかし、彼らはそんな時でも真剣に私を見つめながら、そして頷きながら話を聞くのである。こうした話す人への尊重と礼儀に私はとても感銘を受けた。彼らはまた人当たりもとても良く、謙虚で、進んで私と交流をしてくる。いずれにしても、日本では幼いころから礼儀を重視しているため、彼らとの交流ではいつも心地良い気分になる。

初日の外出を終え彼らの家に帰宅した。そこはとても広いというわけではないが、整然としていた。5人が住む家は、大多数の中国の家庭よりも賑やかである。彼らはまた犬と猫も1匹ずつ飼っていたが、とても人懐こく、家庭全体が楽しい雰囲気であって、また家族同士が互いに尊重し合っていた。そしてお客さん、つまり中国から来た私に対しては、彼らは私の話すことによく耳を傾け、自分たちの知らない新たな物事に触れるのがとても好きなのであった。またとても驚いたのは、お風呂や充電設備など、彼らは私がしたいであろうことを事前に考え準備をしていたことである。つまりこうした他人を思いやる考えが彼ら自身に深く根付いているのである。

それから時間に対する観念については、仕事以外の日常生活でもその観念は強かった。何時に何をするといったことを事前に予定を立て、電車では駅と駅間の所要時間が記されていた。そして最後に私たちは最終集合地に予定より2分早い15時58分に到着した。

大学名：北京理工大学

氏名：杜奕聡

テーマ：3.マナーの良さと思いやり

4.日中間の交流

6.今後ますます中国でニーズが高まる技術

「他人へ迷惑をかけない」という意識は日本の人々に深く根付いている。席を離れる時は椅子を元の位置に戻す、食後はごみを分類する、自分の持ち物はしっかり管理する、公共の場では静かにするなどである。私が最も印象深かったのは、ホームステイ先の1歳半になる女の子が公共の場所に来た時に自分の声を小さくして、自分の持ち物をしっかり持ち、両親の言うことを聞いていたことである。これは中国の子供には絶対に真似できないことであり、日本人の他人への思いやりやマナーといったものは子供の頃からしっかり培われていた。

日本では、毎日の澄み切った青空はごくありふれたものようであった。日本の環境保全技術は非常に進んでおり、産業のモデル転換を模索中で、汚染対策がますます重視される中国にとっては、こうした技術は非常に幅広い将来性を有している。礪子火力発電所では、最も高いボイラー塔からでも濃い排煙は見かけなかった。工業を学ぶ学生として私は今後環境保全技術の研究に携わる可能性があり、日本からしっかり学ぶべきだと思った。

それから少し残念だったのは、今回の交流において多くの日本の人々については長い期間帰国していない華僑の人々が、現在の中国本土の発展状況を知らなかったことである。中日間の交流はより多くの観光客や青少年が日本を訪れるだけでなく、中国の政府や企業もより大きな役割を果たすべきだと思う。交流は誤解を解消し友好を深める最

良の方法であり、私はより多くの人の中日両国の交流に関わることを願っている。発展した日本には中国の市場が必要であり、発展中の中国には日本の投資と技術が必要である。今後さらなる交流の展開により、伝統文化の保護や技術革新、そして企業管理等様々な面で互いに学び、共に発展をする中日両国の未来はより素晴らしいものになると確信している！

大学名：北京理工大学

氏名：蔡子孺

テーマ：1.国民性についての理解

3.マナーの良さと思いやり

今回の訪日で私は日本について一定の理解が得られ、さらに日本の人々から多くの学ぶべき点を見出した。

日本人の時間への正確性は世界的にも有名であるが、今回私はホームステイの際にその点について身を以って体験することができた。ホームステイ先の御宅では各部屋そして客間やキッチン、トイレなどに時計など時間を示すものが置かれていた。それから素晴らしい環境保全意識である。日本に来て以降、私は日本の道路がとても綺麗なことに気が付いた。また外を走っている車もどれも綺麗で、日本の環境の良さがわかった。そして同時に人々がごみの分類をしっかりと行っていた。ホームステイの際、私はホストファザーと一緒に専用のごみ回収場へごみを出しに行ったが、そこでは種類毎にごみが綺麗に分けられ積まれていた。

この他、様々な業種において日本人は他人に対して謙虚で礼儀正しく、こうした他人への接し方はすでに彼らの根底に存在している。彼らは常にお客さんまたは知り合いなどにお辞儀をしてお礼の言葉を述べている。また彼らの企業は強い社会的責任感を有している。私たちが見学した企業では、会社自体の発展を図ると同時に沢山の事業により社会貢献をしており、社員もそれに積極的に参加している。こうした点は中国の企業も学ぶべきだと思う。そして日本人は他人へ謝罪の意を示すことを厭わない。彼らの謝罪は狭義の謝罪だけではなく、その多くが他人へ迷惑や不便をかけたことに対する謝罪である。それに対して中国人は、先に理由を説明して自分は故意ではないことを主張することが多い。こうした違いは主に両国の文化の違いによるものである。

そのため私たちの国でも青少年教育などにおいて礼儀や各方面の意識と素養を高め、スローガンのみに止まらず、実際の行動により社会主義の核心的価値観を実現していくべきだと思う。

大学名：北京理工大学

氏名：平安

テーマ：4.日中間の交流

5.アニメなどのソフトパワー

今回の訪日は、私の日本への印象を大きく変えた。日本と中国は、実際のところどの方面から見ても強い繋がりのある国である。

歴史に関しては、日本と中国は隋の時代から互いに使者を派遣しているという記載があり、それが近代まで続いていた。また両国は経済や文化の面でも古くから交流があり、第二次世界大戦が終結し両国が国交を回復して以降も同様に多くの交流活動が行われてきた。

両国の人々については、私はそのほとんどが平和を望んでおり、そして両国が平和的に発展し、アジアのリーダー

として世界でその役割を発揮することを願っていると思う。

日本のアニメといったソフトパワーの発信に関しては、私はとても敬服している。日本のアニメ産業は非常に力があり、アジアや欧米などで強い影響力を持っている。一つの国の発展においてはその国力の強さだけでなく、現在ではソフトパワーの発信も非常に重要なものになっている。ソフトパワーがその国の人々の考え方に影響を及ぼすことも多々あるため、私は中国も自国の文化や音楽、アニメや映画といったものの発信を強化し、中国の文化の奥深さを広く知ってもらう必要があると思う。

大学名： 北京理工大学

氏名： 趙雨涵

テーマ： 4.日中間の交流

6.今後ますます中国でニーズが高まる技術

この二つのテーマを選んだ理由は、同じ訪日団メンバーの話から感じる場所があったからである。

科学技術の見地から考えると、中日両国には未だ一定の開きがある。中国は3Dプリントや遺伝子工学の分野では比較的進んでいるが、一部の基幹製造業、自動化、汚染処理等の面では今後改善する余地が大いに残されている。特に礮子火力発電所を見学して、私は中国がエネルギー利用においてこれまで以上に力を入れなければならないと感じた。中国は現在産業の高度化の問題に直面しており、古い産業を淘汰し、経済構造を改革し、そして新たな成長点を見出す段階にある。しかし高度化には技術が不可欠である。北京大学の郭家棟さんの分析は的を射ていて、中国には技術がなく、日本にはお金がない。そのため中国の産業高度化は日本にとっては良い投資対象であり、ウィンウィンが期待されるものである。例えば中国の高速鉄道は、その設置時には海外の技術を採用する必要があるため、フランスのアルストムや日本の新幹線の技術譲渡により、最終的にウィンウィンを成し得た。私が思うに中国が直面している問題の一つに効率の低さがある。それには制度的原因と技術的原因がある。技術的部分については海外の企業との交流や技術導入により効率を高め、また一定の技術的改革を促進することができるので一石二鳥である。

それから中日交流における問題については、まず例を挙げたいと思う。ホームステイの際、ホストマザーのお姉さんにあたる方は、様々な報道で国外での中国人の問題がとりあげられてきたことにより、これまで中国人に対してあまり良い印象を持っていなかった。まずこの点については確かに認めるべきだと思う。実際に一部の中国人はその不謹慎な行動により旅行先の人々に悪い印象を与えている。しかし彼女は私と話をするにつれて、それまで抱いていた中国人への印象が次第に薄らいできた。理由は簡単で、ごみをポイ捨てしない中国人を目にしたからである。これこそが交流の役割である。また中国国内も同様で、多くの人が日本人への偏見を持っているが、それらの偏見は主観的な憶測によるものである。彼らは日本人と交流をしたことがなく、日本を知る手段も限られている。それはホストファミリーも同じで、彼の中国への知識はさほどなく、多くのことはいずれも私の紹介によりどうして中国はそうなっているのかを理解したのである。例えば中国の一人っ子政策について、当初彼らはどうしてそのような政策を行うのか奇妙に思っていたが、私が中国には14億の人口がいることを伝えた後、彼らはその理由を理解した。多くの誤解は理解が少ないことによるもので、私は互いに意見を交わし双方の状況を理解すれば、両国の人々の関係は良くなると思う。

大学名： 北京外国語大学

氏名： 劉南星

テーマ： 1.国民性についての理解

2. 集団帰属意識の強さ

日本・東京。

ここは依然として世界で最も大きな都市の一つであり、日本の人口の約10%と世界各地からのゲストや定住者が集まっている。だがここは全てが整然としており、利便性が高く、言葉もほとんど旅行における障害とはならない。

ホテルニューオータニの驚くべき地下の様子と同様に、日本で体験した快適さの裏にはいずれも多くの人が知らない努力がある。そしてこうした努力の背後にあるのは、今回私が日本で最も印象深かった職業精神と集団意識の二点である。

日本人の職業精神はサービス業において余すところなく表れている。日本のサービススタッフの接客態度の良さは、中国においては恐らく「海底撈」でしか体験できないと思う。こうした接客態度は本質的には一種のプロ精神である。日本人がどれほど自分の仕事を愛しているのかはわからないが、彼らは自分の仕事に忠実である。運転手や掃除担当者など皆がそれぞれ自分の職場において真面目に仕事をしている。

もう一つ印象深かったのは集団意識である。日本の街にある看板などではよく「みんなの〇〇」という表現を見かけた。これは「公共」という言葉よりも親しみやすく、こうした集団への帰属、集団と共に生活しているという意識が日本人の「他人へ迷惑をかけない」という考え方に繋がっている。そして皆がこれに関して共通認識を持った時、「規律を遵守する」ことが国民性の一部分となるのである。

私が思うに、「国民性」は決して変わらないというものではない。それは社会の発展状況や思想により変化をしていくものである。この点に関して、中国は日本に学ぶべき所があると思う。

大学名： 北京外国語大学
氏名： 潘向茹

テーマ： 4. 日中間の交流

8日間の訪日の旅はあっという間だったものの、私は日本についてより直接的な認識と理解を得ることができた。この間様々な事を考えさせられたが、最も自分が考えたのは日中間の最大の課題である両国の交流問題であった。

私が新たな角度でこの問題を考える契機となったのは、ホームステイの際のホストマザーとのある会話であった。彼女は中国人であるが、すでに日本で8年間生活しているため、ライフスタイルや考え方、思想や観念といったものが日本の影響を強く受けている。だが心には永遠に変わらない中国という家がある。彼女は現在の中日関係についてとても残念がっていた。彼女は、日本に住んでいる中国人こそが或いは最も両国の平和と友好を願っているのかもしれない、と語っていた。私は彼女の言葉に胸を打たれ、なぜ中日間の友好関係の実現はこれほど難しいのか？歴史や領土問題だけが原因なのだろうか？と考え始めた。

私が思うに、両国の交わりの根本は民の親しきにあり、である。たとえ政治上両国の国交が正常化しようと、もし両国の国民同士が互いに反感を抱いていれば、両国の平和と友好など絵空事に過ぎないのである。中日両国の民間における互いの友好度は非常に低く、その理由はお互いの理解不足と誤解によるものである。それでも近年、日本に旅行に来る中国人が増えたため、中国人の対日友好度はこれまでの5%から30%に上がっているが、日本人の中国に対する友好度は依然としてこれまでの5%前後に止まったままである。このことは相互交流がいかに重要かを示している。私たちは日本を理解するだけでなく、これまで以上に日本に対して中国を紹介し、より多くの日本人に中国人の友好の心や中国文化、そして中国の魅力を知ってもらうことが重要である。それと同時に、企業の社会的責任感の欠如、国民のさらなる素養の向上が必要、社会発展の不均衡、人と人との信頼感の欠如、伝統文化の継承、イノベーション能力の不足といった私たちの問題点を認識した上、絶えず己を向上させ、尊大にも卑屈にもならず、平穏な心で

己と他国に接することで、はじめて中国は国際社会から幅広く認められると思う。

日本語を専攻しているものとして、私は自分が将来中日友好の役に立てることを願っている。

大学名：北京外国語大学

氏名：劉思陽

テーマ：1.国民性についての理解

来日する以前は、書籍やメディアそして日常における日本人の友人との交流によって、日本人の性格については一定の理解をしていた。そして今回8日間の訪日によって、私が最も印象深かったのは物事への計画性と些細な部分への重視である。

企業見学の際、ほとんどすべての企業から事前の企業資料の配布と、当日のタイムスケジュールの連絡があった。そしてそれぞれの段階で何をするのか、そして所要時間はどれくらいかを事前に計算し、会場設置もとても綿密で、人為的要因では計画にほとんど誤差はなかった。この他ホームステイでの交流においてもこの点を感じた。訪日の一週間前にホームステイ先からメールが来て、家庭内の状況や二日間の行動予定など詳細なスケジュールの紹介があった。その中ではスカイツリーの予約や私の食の好みに合わせて初日の夕食と二日目の昼食の予約がしており、実際の見学の前には事前にその観光地の資料を参考用に渡してくれた。こうした非常に計画的な行動方式には本当に驚かされた。

また、日本人のマナーや思いやりなどもとても印象に残っている。その最たるものは交通ルールにおけるマナーである。日本に着いて間もない頃、私は路上で何度か車を先に行かせようとしたが、いずれも車のドライバーが先に車を止め、私を先に行かせたのである。こうした譲り合いは中国の路上ではほとんど見かけることはない。そしてレストランでの食事の際、サービススタッフはいずれも自分よりかなり年上であったにも関わらず、私たちに対して恭しくサービスを提供するので少し気恥ずかしくなった。今回わずか8日間の訪問で日本や日本の人々を垣間見たに過ぎないが、これを始まりとして今後日本への理解を深めていきたいと思う。

大学名：北京外国語大学

氏名：陳鑫

テーマ：3.マナーの良さと思いやり

中国では私はドラマや映画、アニメなどを通じて日本のマナーというものを理解していた。

そして日本に来てから、私は本当の意味で日本はこうした礼儀正しい国だということに気が付いた。客室乗務員そしてホテルやレストランのサービススタッフであれ、または一般の人々であれ、皆が常に微笑みをたたえ、話し方や所作がしっかりしていた。中国に比べ、日本はマナーにおいて遙か先を進んでいる。本来「礼儀の国」であるはずの中国は、この点において負けを認めざるを得ない。中国の路地では至るところでゴミやガムの痕跡を見かける。しかし日本では綺麗な路地にはゴミ箱すら見られない。大声で話をする人もいなければ行列に割り込む人もいない。何においても秩序立っているのである。車が歩行者に道を譲り、スピードを出し過ぎたり赤信号を無視したりすることもない。ホームステイではホストファミリーはとても親切に私に接してくれた。日本の家庭のおもてなしに私はとても心を打たれた。彼らは私の全てのことに気を配り、居心地が悪くなることは全くなく、まさに「自分の家にいる」感覚であった。私は社会であれ個人であれ、中国は日本に学ぶ必要があると思う。

大学名：北京外国語大学

氏名：崔正佳

テーマ：3. マナーの良さと思いやり

私は日本語を学ぶ以前から日本人はマナーを重視し他人を思いやることを知っていたが、日本語を学んで以降知り合った日本人も確かにその通りであった。そしてまさに百聞は一見に如かずで、私は今回の訪日で日本人の礼儀正しさを、身を以って体験した。

今回の活動当初から、ガイドの方から私たちへ自分のすべきことをしっかり行い、他人へ迷惑をかけないといったマナーにおける注意点の説明があった。私はこうしたものは他人への尊重が基本になっていると思う。なぜなら尊重するからこそ、他人を思いやりそして自律的になるからである。

サービス業がマナーを重んじるのは自然なことだが、中国と違うのは、サービスを提供する際にさらに感謝を述べるのである。これには最初は私も慣れなかった。サービスをしてもらっているこちらが感謝を述べる前に先に感謝をされるのである。こうした礼儀正しさはその会社がしっかりしていて信頼に値することを印象付けるものである。それからまた日本人は交通ルールをしっかり守る。日本の横断歩道は短く赤信号の時間も長い、人々は賑やかな場所であれ静かな場所であれ皆ルールを守っている。私は言葉というものは人の考え方に影響を及ぼすものだと思う。日本語は比較的婉曲で、話をする際に意見を言い切ることはなく、常に他人を思いやる。マナーも他人を思いやる一種の表れである。訪問先ではペンやノートそして水などが準備されており、プレゼントをもらえば皆で分け合い、グループ討論では他人の考えを尊重し、雨に濡れた傘は傘入れ袋に入れてから入室し、退席時は椅子を元の位置にもどす。これら一切が心からの気遣いを感じさせるのである。

私たち中国は礼儀の国であり、日本の多くの礼儀は中国から伝わったものである。しかし、私たちには気遣いというものがない。小成は天性の若し(幼い頃に身につけた習慣はもって生まれた天性に等しい)、習慣は自然の如し(習慣は深く身につけて天性のようになる)である。こうした素晴らしい習慣は、尚のこと私たちが長い時間をかけて幼い頃から育んでいくべきであり、礼儀はいくらどくてもとがめる人はいない。私は中国に戻った後も、自分の行動によって多くの人の模範になりたいと思う。

大学名：北京外国語大学

氏名：賈子赫

テーマ：5. アニメなどのソフトパワー

日本は間違いなく世界一のアニメ強国である。程度の違いこそあれ、私たち世代の大多数が日本のアニメに影響を受けていると言える。日本の重要産業の一つであるアニメ産業は、常に日本の国内外市場において脚光を浴びると同時に、巨大な経済効果を生み出している。日本のアニメ産業が多くの国において際立った存在となり、これほど大きく発展したのは、私は三つの要因があると思う。

はじめに提携メカニズムである。日本のアニメ産業では、各段階の業務には明確な分業体制がある。動画を例にすると、日本の動画制作会社は通常二種類あり、企画作成をする「企画会社」と、もう一つ実際に動画を制作する「制作会社」がある。一般的にはこの二つの会社により作品が創られるが、一つの会社が企画と制作を兼務することもある。通常は、脚本、スケジュール、コマ割り、設計、原画や監督作業は企画会社が行い、制作会社は描線、着色、特殊効果、校正、撮影、印刷、編集や音入れなどの作業を担当するなど、分業の細かさや提携システムの複雑さが見て取れる。

次に制作チームである。日本のアニメ作品の制作者と消費者の間には良好な交流がある。新たなアニメ作品のほとんどが漫画のテスト発刊の過程を経る。仮に市場の反応が良くない場合は、修正ひいては廃刊となる。そのため、制作者は作品の発行と市場からの認知という二つの関係性をはっきり認識している。見た目が愛らしく、人々の共感が得られ、皆から好かれ、印象に残る作品は、多くの制作者が追い求めるものであり、こうした創作精神の下、そのキャラクターは世界のアニメファンからの支持を受けているのである。

そして社会基盤である。日本のアニメは基本的に青少年向けに制作されていて、共感を得られやすいストーリーにするため学校生活をその舞台とし、或いは架空の世界を舞台とした熱血的なものが多く、主人公はその多くが青少年に憧れられやすい外見をしている。また人々へのアニメの浸透度も高く、若い世代は幼い頃よりアニメに触れている。その他の国に比べ、日本では一般の人々がアニメに参加する「同人」の割合が高い。同時にアニメに関する配信メディアや周辺商品の種類も豊富で、その数も驚くべきものである。こうした状況は、なぜアニメが最も「大衆性」を有しているかを説明していると言える。

もちろん日本のアニメ産業の優位性はこれだけに止まらない。私は、日本のアニメは全ての優位性を融合させたからこそ、世界のアニメのトップの位置にいるのだと思う。そしてこの功績は過去にはなく、これを再現または超えるのは至難の業だと思う。

大学名： 中央音楽学院

氏 名： 孫詩博

テーマ： 3. マナーの良さと思いやり

私が選んだテーマはマナーの良さと思いやりである。日本人の民度の高さは世界でもトップクラスであり、もちろん彼らのマナーも複雑で厳しいものである。

例を挙げると、家で食事をする際、父親は上座で食事をし、母親は食卓で食事をする人の手伝いをする。またある時、私はエスカレーターに乗った際無意識に右側に立っていて、後方の急いでいる女性からすみませんと声をかけられた。明らかに私が立つ位置を間違えていたのに、彼女が先に謝ったのである。それから日本の街路はとても清潔でゴミも見当たらない。これは中国では想像すらできないことである。また大きな通りではゴミ拾いをしている人を常に見かけた。これにはそのマナーや素養の高さがうかがえる。

もちろん他人への思いやりという点では、時間への正確さなどもその一例である。ホームステイ先の御宅では各部屋に時計が置かれていて、どこでも時間を確認することができ、常に時間を守るということを自分たちに言い聞かせているかのようであった。

中国は春秋戦国時代から礼の観念が形成され、孔子も礼の決まりごとを書きまとめている。しかし時代の変遷により、私たち中国人は次第にこうした貴重な文化を失っている。逆に私たちの隣国である日本では、それらが現在まで受け継がれている。

これはどれだけ再認識すべき問題であろうか。日本では本当に色々なことを考えさせられた。文化がこれまで以上に高まり、さらに中国五千年の文明における優秀な文化を改めて再確認し、祖国がより良く発展していくことを願っている。

大学名： 中央音楽学院

氏 名： 韓天雅

テーマ： 3.マナーの良さと思いやり
5.アニメなどのソフトパワー

日本のソフトパワーについて、私が最も馴染みがあるのは日本の伝統音楽である。

日本は私がとても憧れている国で、日本の文化に対する伝承や保護は私たちが学ぶべきものである。中日両国の音楽には多くの共通点がある。例えば日本の琴や三味線は、中国の古箏や三弦が基になっており、現在ではすでに独立したものとして日本の伝統音楽を代表するものとなっている。今回の訪日で、夜の自由時間の際、私は東京芸術大学で著名な古箏の演奏家である毛丫先生にお会いし、日本の人々は伝統音楽をとっても愛し、日頃より演奏会を鑑賞していることを知った。そしてこの数日間、日本の街中やレストランなどでは雅楽を頻繁に耳にした。こうした面が人々に影響を与えているのだと思う。

日本の伝統音楽および文化への伝承と保護には敬服させられた。彼らは自国の音楽を完全に保存しているだけでなく、ひいてはわが国の唐の時代の「伎楽」も保存し、しかもその演奏が可能なのである。残念なことに中国はその演奏ができず、伝承が途絶えてしまっている。

私は自分たちの努力を通じて、中国伝統音楽のソフトパワーの保護や発展に貢献したいと思う。

大学名： 中央音楽学院
氏名： 祝紅

テーマ： 4.日中間の交流

幸運にも今回の訪日交流活動に参加することができた。日本での交流によって、私は日本文化とそして中日両国文化の差を体験することができた。日本を訪れる前、私は表面的に日本の文化を知っていたが、実際に交流をして私は日本に対して新たな認識を抱いた。東京に着いた初日から、最も印象深かったのは日本人の礼儀であった。日本人は知り合いであろうがあるまいが、他人と会うと会釈をする。それから、話をする際のマナーである。日本人は公共の場所では大声で話をせず、浮ついた印象を与えない。また日本では至る所で人への優しさを感じる。電子機器であれ何であれ、いずれも人への配慮を感じさせる。歴史は書き換えることはできないが、「求同存異(小異を残して大同につく)」という言葉もある。これは両国の交流における最良の答えだと思う。私たちは自分たちのすべきことをし、中国文化を広めていくと同時に他国の優れた点を学び、私たちの国をより良いものにしていかなければならない。

大学名： 中央音楽学院
氏名： 朱瞳瞳

テーマ： 3.マナーの良さと思いやり

8日間の日本訪問は私に多くの思い出を残してくれた。日本は「礼儀の国」であり、マナーを重んじるのは日本人の習慣である。今回はまたホームステイがあり、さらに日本の人々そして大学生と交流することができ、彼らに対して一歩踏み込んだ印象が得られた。

まず、初対面時の名刺交換だが、日本人はこれをとっても重視している。日本人にとって名刺はその人を代表するものであり、名刺の扱いはその人自身の扱いと同等である。そのため名刺を受け取った後、その名刺をよく見ずしまうような行為は失礼にあたる。この点は中国とは非常に異なっている。

それから、日本人は親戚や友人を訪ねたりする際にはお礼の品を持参する。彼らは贈り物をするのは日頃の感謝を表すものだと考えている。そのため、日本人の作る商品は中身であれ、また包装であれとても美しい。そして彼らは綺麗なリボンや紙ひもでそれを結ぶ。なぜなら日本人は結び目には人の魂が宿ると考えているからである。

日本人の文化はどれも些細な部分に表れていて、多くのわずかな所作がこの国の文明を物語っている。これは私たちが学ぶべきところだと思う。

大学名： 中央音楽学院

氏 名： 劉書辰

テーマ： 1.国民性についての理解

今回の訪日の過程を思い出す時、真っ先に脳裏に浮かんだのは「細致入微(微に入り細にわたって)」の四文字で、大小様々な方面からそれが感じられた。

まず出発前の準備から日本人の細部への注意や処理の正確さが感じられた。大きなものでは毎日のスケジュールが分刻みで作られ、小さなものでは私たちに準備された資料がどれも丁寧に作られている。民は食を以て天と為す。日本の食文化はよりこの点を表している。小さな器には様々な食材が並べられているが、とても調和がとれている。そして選び抜かれた食材、繊細な味付け、洗練された食事作法などすべてが理にかなっている。

またオムロン京都太陽株式会社を見学した際、物品の借用時には後の人が連絡を取りやすいようにホワイトボードに返却日時と名前を記載していることに気が付いた。

私は「一步を積まずして千里に至らず、小流なくして江海とならず」と言いたい。こうした物事への対処や人としての在り方の細やかさというのは、私たちが学ぶべきものである。

大学名： 中央财经大学

氏 名： 宋佳音

テーマ： 3.マナーの良さと思いやり

日本で生活したこの数日間、私はこれまで体験したことのない快適さを感じていた。こうした自然な快適さは中国ではほとんど感じることはなく、誰かの行列への割り込みにより、さらには自分が寝ている時に誰かが大声を出すことにより、またはレストランのサービスが悪いことによりその日の良い気分が台無しになったりする。日本の快適さは一部の人が言うように表面的なものである場合もあるかもしれない。しかし私は実際に日本に来てからは、これは長い時間をかけて育まれた習慣なのだと感じている。礼儀正しい習慣はそれがどういったものであれ、悪い習慣よりは良いのではないだろうか。

私は日本のサービスがどれほど優れているかについて多くを語るつもりはない。なぜなら私が日本に来る前に聞いていた評判と同じだったからである。だがその評判からは一点だけ、日本を紹介する本などでよく述べられている「偽善感」はそこにはなかった。私たちに映画の紹介をしてくれた係員は満面の笑顔で紹介を終え人のいないところに下がっていく時、笑顔を絶やすことはなかった。それがたとえ一種の習慣であろうと、笑顔の習慣は冷たい表情をする習慣よりは遥かに良いものである。

日本では、エレベーターやデパート、またレストランであれ、とても快適である。それは人々が互いを思いやり、最大限自分の行動を規範化し、他人へ迷惑をかけないようにしているからである。これにはそうした気遣いは疲れると言う

人もいるかもしれないが、実は私はその考えには賛成できない。もし皆が他人を思いやれば、その力の作用はお互いのものであり、自分が他人から受ける力も快適なものなのである。多くの不必要な煩わしさを無くす、こうした生活こそ人をより気楽に感じさせるのではないだろうか。私は心から他人を思いやることは素晴らしい習慣だと思う。もちろん日本人の他人を思いやる習慣は一挙に成し遂げられたものではなく、幼い頃から思いやりの教育を受けてきたのである。それゆえもし中国社会がこうした素晴らしい習慣を育もうと思うのであれば、基礎教育の段階から始めなければならない。

大学名： 中央財經大学

氏 名： 車佳寧

テーマ： 1.国民性についての理解

今回の8日間の訪日活動において、私たちは多くのこれまで知らなかった日本を知ることができた。その中でも私が最も印象深かったのは、日本人はとても真面目だということである。

日本は真面目な国である。その国民の真面目さは生活や仕事など様々な面に表れている。企業の見学では、磯子火力発電所とオムロンが私にとってはとても印象深かった。従来からの石炭を燃料とし発電をしている磯子火力発電所は、国の排出基準を満たしてもなおより良い成果を求め、世界でも最少の排出を実現し、ひいてはクリーンエネルギーと同等の環境保全レベルに達している。これはスタッフの飽くなき技術への探究と業務への真摯な態度によるもので、私たちが学ぶべきものである。またオムロンは計器類のトップブランドである。同社の血圧計など多くの製品は海外で高い評価を受けており、高い知名度を誇っている。私たちは同社のこうした華やかな業績の裏側にあるものについて、実際に見学を通じて知ることができた。オムロン京都太陽株式会社のスタッフはそのほとんどが何らかの障がいをもっており、同社の素晴らしい製品はまさに彼らの手から生み出されていたのである。作業場では、生産ラインのスタッフが身体に不便を抱えながらも真剣に作業をしていた。私はその姿に心から敬服の念を抱いた。彼らは自分たちの身体のハンデを理由に自分への要求を下げることはなく、製品の検査過程などもとても厳しいものであった。これには日本の人々の真面目な性格について改めて認識させられた。

感想などはまだたくさん有ったが、これから先私は自身への集中力や厳格さを培い、社会に貢献していきたいと思う。

大学名： 中央財經大学

氏 名： 遼黛妮

テーマ： 1.国民性についての理解

6.今後ますます中国でニーズが高まる技術

今回日本での交流において、私は日本の国民性についてより深い理解を得ることができた。日本人は比較的平穏で実務的、また謙虚であり、自分のすべき仕事をしっかり行い、欲張らない。彼らは集団における歯車の役割を好み、自分を目立たせたり、他人を追い抜こうとしたりすることはない。こうした国民性は日本人に些細な分野において巨大な価値を創造させ、日本企業のウィンウィンや共同発展というものに繋がっている。またこうした国民性は日本の清潔さや秩序の良さに表れており、日本人それぞれが自分たちのすべきこととして身の回りの清潔さに気を配っている。そして何事も整然としている。それは彼らが自分の行為を集団の合理的運営を基準として規範化することで、個人が集

団に従っているからである。こうした勝気ではない歯車の精神は幼い頃からの非競争的教育に由来している。助け合いを好み競争を好まない教育の下、日本人の性格からは他者を押さえつけるような激しさ、他人に対する疑念や利用、出世に対する暗闘が失われ、代わりに調和のとれた発展を願う優しさ、他人に対する信用や手助け、自分の仕事に対する責任感が増したのである。

私は今回の企業見学の際に、日本の多くの技術が現在中国では求められていると感じた。例えば磯子火力発電所の超々臨界圧火力発電技術は、今後中国の火力発電所が発電効率の向上や汚染の低減のためにとり入れるべきものである。またホテルニューオータニのエコシステムや污水处理システムは中国のホテルがとり入れるべきものである。さらにオムロン京都太陽株式会社の身体障がい者を対象とした労働環境の構築、さらに製品品質の保証のための管理モデルは、中国が今後弱者層保護のために学ぶべきものである。

大学名： 中央財經大学

氏 名： 楊敏媛

テーマ： 4.日中間の交流

5.アニメなどのソフトパワー

6.今後ますます中国でニーズが高まる技術

私は、中日両国における民間交流はその量や深さなどまだまだ足りていないと思う。例えば日本の大学生は、中国の学校には恋愛禁止の規定があることを知らず、私のホストファミリーは、中国が1949年から今日まで一人っ子政策を行っていると考えていたなど、互いのあまりにも少ない交流は、両国の友好的な関係に不利に働いていると思う。

日本はソフトパワーにおいて独特の優位性を有している。京都の歴史ある建築物は言うまでもなく、街中やホテルニューオータニで見かけた神社や神棚は、日本の伝統文化を至る所で感じさせた。また日本は現代化の中で己を見失った国ではない。特にホストファミリーの上野夫人が連れて行ってくれた江戸風鈴制作では、私は日本の伝統文化の継承度合に驚かされた。こうした点は中国が学ぶべきものだと思う。

それから私は、磯子火力発電所のクリーンコールテクノロジーは中国が必要としている技術だと思った。また聞いた話によると、私たちが日本にいたこの数日間、北京のスモッグはととてもひどかったらしい。と言うのも隣の山西省は中国の石炭の主要産地であり、大量の採掘によりひどく環境が汚染されているからである。同じ石炭による発電なのに、なぜ中国は環境に優しくできないのであろうか？

大学名： 中央財經大学

氏 名： 粟鳴飛

テーマ： 4.日中間の交流

今回の訪日活動に参加して、私は日本人に対して客好きで親切であるという印象を持った。同志社大学の学生と交流した際、彼らは私たちにとても親切にしてくれた。キャンパスを案内してくれた他、学園祭の出店では食べ物をご馳走してもらった。この他ホストファミリーも秋葉原や渋谷を案内してくれた他、彼らの家では盛大な歓迎を受け、さらに中国へ旅行に行きたいといった話が出るなど、同様にとても親切であった。こうしたことから私は、多くの日本人が中日両国の友好的な交流を願っているのだと感じた。

しかしながら、私もインターネット上で「日本人の中国人に対する友好度合が高くない」という情報を見たりする。しか

も現在、中日両国政府はその関係改善が待たれている。ここで私に、ある疑問が浮かぶ。私が交流している日本人が少なすぎるのだろうか？または日本人への全般的な理解ができていないのであろうか？

よくよく考えると、「日本人の中国人に対する友好度合が高くない」というのは、ある程度その理由があると思う。まず、ここ近年中国から日本への観光客数は増えているが、日本から中国への観光客数は芳しくない。次に、ただの旅行であれば双方が直接交流することは少ない。なぜなら中国人は旅行の場合、名勝地に行き、そしてショッピングをすることがほとんどだからである。また日本人の場合については詳しくはない。しかし中国人の側からすると、日本には来たが、日本人との交流や日本への理解に欠けている。この他、一般的な中国人の素養は高いとは言えないことと、中日両国は多くの面でライバル関係にあり、GDPが日本を超えたなど現在では中国が優勢にある分野も増えている。私はこれらの要素が、日本人が中国人に対して非友好的になる原因だと思う。そのため中日両国の民間交流にはまだまだ向上の余地が残されている。

いずれにしても、中国の発展に伴い、中日両国の各分野における交流はますます増えていく。そして中国人の素養も次第に向上し、私たちの今回の交流活動のような活動が今後も増えていき、日本にも同志社大学の学生や私のホストファミリーのような中日友好を願う人たちがいる。今後の民間の友好基盤は固く、私も中日両国の友好交流の役に立ちたいと思う。中日両国の発展に伴い、民間の友好交流はきっとますます増えていくと信じている。

大学名： 中央財経大学

氏名： 高鵬崢

テーマ： 4.日中間の交流

中日交流は皆がよく話題にすることだと思う。一大学生である自分はこれについて多くを語ることはできないが、自分の感じたことから述べてみたいと思う。

大使夫人が仰っていたように、日本の学生はあまり中国に来たがらない。なぜなら空気は悪く、国民の民度は低く、さらには日本人を嫌っているからである。しかしながら、日本人は中国だけに来たがらないわけではなく、日本以外の国を見たりそこで生活したりすること自体にさほど興味がないという。もしも中日交流が両国の問題だとすれば、中国が一方的に日本に学び交流するだけでは不十分であることは明白である。そのため、いかに日本に中国への正しい認識を持ってもらい、中国を理解してもらうかが重要なテーマとなる。

中国の空気が良くないのは私も認めるが、それでもまだ多くの風光明媚な自然景観を楽しむ事ができる。中国国民の民度は高める必要があるが、それでも多くの人が中日友好のために貢献をしている。中国には抗日ドラマが確かに存在しているが、それでも毎年たくさんの交流団体が日本を訪れている。だからこそ、日本人が中国への認識のずれの影響で中国に来たがらないのであれば、なぜ私たちはそうした彼らの認識のずれを正そうとしないのか？相手はこちらに対しての誤解があり、こちらの家に来たがらないのであれば、なぜこちらは相手の家に行った時に可能な限りのこちらの善意を相手に感じさせようとするのか？つまりは、私たちは日本を訪れ学ぶ際にも、その過程において日本の人々の私たちへのイメージを高めるための努力をしなければならないということである。

継続をする限り、変化とは少しずつ起きるものであると私は信じている。